

# 町民文芸



## 只見短歌会

六月詠草

大塚栄一

指導

古川 英子

面会に来し病みあとの夫にして着替へし服の是非などを問ふ

小倉キミ子

降り積みし雪も緩める春の日に木々白ふごと芽吹きゆくらし

関谷登美子

日に映ゆるうつぎの花に湧きてくる思ひ出抱き眺めて立てり

馬場 八智

狭き庭に植ゑし山野草次々に咲けば爽やかな目覚めとなりぬ

新国由紀子

おしゃぶりを落として寝入る孫の辺に音をひそめて玩具を片す

渡部ゆき子

池の辺の藤の葉なべて知らぬ間にまひまひ毛虫にむしばまれたり

目黒 富子

田表を吹きゆく風に葉裏見せ波打つ苗の育ち感じる

五十嵐夏美

届きたる友の葉書に描かれし水引き草の花は優しき

渡部ヨリ子

新緑の山に害虫の被害多く新芽見られず茶色が目立つ

新国 洋子

われの臥す部屋替へすると子と孫は介護士に聞き図面書きある

(出詠順)

## 只見俳句会

七月例会

目黒十一

指導

礼

吉児

第一回の雪室まつり緑さす

逃水を追ってルンルン浜街道

夏至今日の一日さずかる遠出かな

梔子の無垢の芳香苦の家

順子

邦男

夏草や同じシャツ着る応援歌

ほうたるを呼ぶ声遠き水の里

赤蝮骨のゆるみて瓶の底

山緑同期の友の旅立ちぬ

修一

リウコ

夕立に向かう単線一車両

菊葉の紅鮮やかに不況なり

東京の夏の灯ながめ電車待つ

登りきて駒止峠の青嵐

一穂

都

隈取りの子供歌舞伎や夏まつり

田植之機と女も走る植之田かな

母の服リフォームして更衣

山椒の指まで白う台所

敦子

恒夫

遠き日の兄の草笛土の橋

西日さす祖父の一字の蔵屋号

一輪の大山蓮華向座に咲く

床下に朽ちし舞台や夏神楽

恒夫

恒夫

遠き日の兄の草笛土の橋

西日さす祖父の一字の蔵屋号

一輪の大山蓮華向座に咲く

床下に朽ちし舞台や夏神楽

恒夫

恒夫

遠き日の兄の草笛土の橋

西日さす祖父の一字の蔵屋号

一輪の大山蓮華向座に咲く

床下に朽ちし舞台や夏神楽

恒夫

恒夫